Everything I need to tell you about IAF Asia Conference 2019 in Kuala Lumpur, Malaysia

Reported by
石垣綾音
Ayane Ishigaki

マレーシアはドリアン天国！
最高です！

石垣綾音 いしがきあやね

▶1990年生まれ 沖縄県出身。ハワイ大学大学院で 都市計画を専攻しつつ、市民主体・協働のまちづくりの文脈からファシリテーションについて学ぶ。ハワイの地元コンサルにて働いたのち、2015年帰国後は沖縄の建築コンサルにて行政の都市計画策定業務に関わり、住民と行政をつなぐワークショップなどを担当する。

▶2018年にIAF認定プロフェッショナルファシリテーター（CPF）認定。

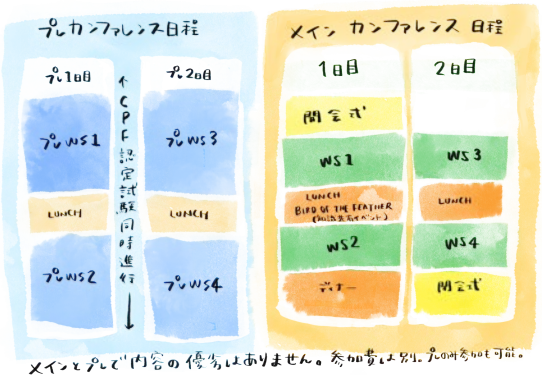
▶2019年より、まちづくりを考えるデザインラボ「こみゅとば」を立ち上げ、県内各地で活動中。

What is IAF Asia Conference?
ーIAF アジアカンファレンスとは？

世界中のファシリテーターが情報交換や技術の研鑽のために所属する、International Association of Facilitators (国際ファシリテーター協会）のアジア支部が開催するカンファレンスです。1年に一度アジアのどこかで行われ、アジア地域だけでなく、世界各国からファシリテーターが参加し、ファシリテーションをテーマにした様々なワークショップが行われます。

日程

カンファレンスの本日程は2日間ですが、その前の2日間は、プレカンファレンスとして本日程とは異なる内容のワークショップと、CPF*認定のための試験が行われます。
本日程の間には、2つのワークショップの枠があり、参加者は興味のあるトピックを選んで参加します。その外、知識の共有を図るミニイベント、開会式などが含まれています。



ワークショップは、2時間の枠の中で複数のトピックで同時に4つほど開催されます。参加者はその時間の枠で開催されている複数のワークショップの中から、一番興味のあるものを選んで参加します。人気のあるファシリテーターやトピックはすぐに満員になるため、早めの事前登録が必須です。

***CPFとは？**

CPF＝Certified Professional Facilitatorの略。世界ファシリテーター協会認定のプロフェッショナルファシリテーターであることを示すものです。ファシリテーターとして最低限必要とされているスキルを満たしているかどうか、IAF行う実技を伴う試験に合格すれば認定がもらえます。CPFの試験は1年を通して世界各地で行われていますが、カンファレンス開催地では日程を合わせて実技試験と最終面接が行われます。

開会式

開会式
所属する国がバラバラになるように着席を促され、それぞれ8名ほどずつテーブルを囲むグループになります。これはホームグループと呼ばれ、アイスブレイクや1日の終わりの振り返りなどを一緒に行うチームになります。

オープニングとして大会の説明が行われることはもちろん、ホームグループでチーム名やシンボルを決めるなどのワークも行います。
アジア大会ですが、ヨーロッパやアメリカからも少なからず参加者がいます。共通言語はもちろん英語。多様なアクセントの英語が飛び交う中、カンファレンスがスタートします👩🏾🧔🏽👩🏻‍🦳👩🏻👨🏻‍🦱🧑🏻👦🏻🧕🏾👦🏾🙌✨

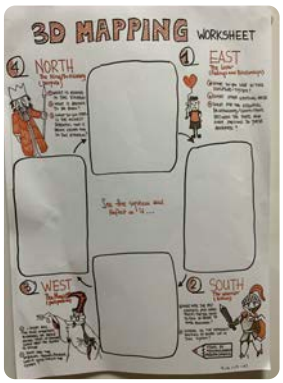
開会式後の記念写真。参加者は200名超えの大所帯！

WS#1 アートを取り入れたファシリテーションプロセス
Process Facilitation through Arts
(Client relationship)

私が登録した最初のセッションはProcess Facilitation Through Arts. クライアントとの関係性を、アートを通して見つめ直し、解決策を見出す手法です。
開催数日前に、「床にすわったり、粘土で彫刻したりするので、カジュアルな服装でお越しください」とのアナウンスがあり、かなり楽しみにしていたワークです👀

考えるのではなく、体を通して感じること、感じたことをそのまま表現することから、ヒントを得るのがこのワーク。まずは音楽に合わせて感じたままに体を動かすところから始まりました🕺🏂これが後々自分がつくった粘土彫刻を理解することに繋がってきます。U理論でいうところのSensingのパートですね。

ペアに分かれて、自分とクライアントの置かれている状況を表す作品をつくります。たとえ自分が何を作っているかわからなくても、ひたすら自分の手の動きを信じて、思いつくままに粘土をこねます。
パートナーが制作している間も、もう1人は手を動かさずじっと一緒にその瞬間を共有します。相手の作業を大切にしてあげることや、それを態度で示すことも重要だと言います。



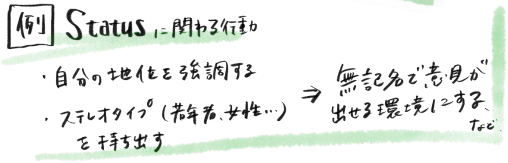
片方が作り終えたら、立ち上がって、どの方向から作品を見るか決めます。その後、ワークシートに従って、4つの方角から、それぞれ別の観点で質問をし、作品や状況について、どう見えるか分析していきます。
質問と観点を変える際には、実際に作品に対する立ち位置を変えます。こうすることで、今まで見えてこなかったことに気づいたり、解釈が変わったりしてきます。観察と質問を繰り返すことで、この状況がどうなればいいのかについて感じ取り、言葉にしていく作業が行われます。
作品は抽象的かつ比喩的で、質問に対する答えも比喩的なもので良いため、直接的な話をするよりも広い観点から分析することができます。また、聞いている方も、詳細にとらわれずに、想像力を働かせながらコメントするので、負担も大きくなく、かつそこから何らかのインスピレーションが現れるところが、面白いワークでした。

カンファレンスでは、各ワークショップにグラフィックレコーダーが配置され、そのプロセスを記録してくれます。それぞれのワークでどのようなプロセス・話題が出てきたのかわかりやすく、後でふりかえる際にもとても役にたちます。（何より見ていて楽しい！）

1日目のランチタイムには、Bird of a feather🕊️というサイドイベントも行われました。
これは、何らかのトピックについて共有したい人たちがテーブルオーナーとなり、参加者と話を深める時間です。
今回は、「草木染めとファシリテーションの関わり」というトピックが面白そうだったので参加しました。
テーブルオーナーはマレーシアのMasitahさん。洋服の染料が、化石燃料に次ぐ環境汚染の原因であることを知り、天然染料について興味を持ち始めたそうです。
天然染料の色を引き出すためには、細心の注意を払い、きちんとした手順を負わなければなりません。しかし、それでもどのような色が出るかは、終わってみないとわかりません。最大限の準備をし、あとは忍耐強く待つ。そこに、ファシリテーションとの共通点を見出したそうです。このような自然との付き合い方の中に、ファシリテーションにも重要なことが隠れているのかもしれません。
この後は、自然のプロセスや良さをいかにワークショップに取り入れることができるかについて会話が盛り上がりました。
予想もしなかったアイデアに出会えるのも、このようなカンファレンスならでは。
他にも、カンファレンスには休みの間ごとに、他の参加者と交流できる機会（多くの場合は地元の食事を楽しみながら）がたくさん設けられています👍✨

2つめのワークショップは、SCARFという神経科学のモデルを用いて、ネガティブな態度や関係性において、その背景にはどのような価値観や心理的な壁があるのかを理解するというものです。

まずは、自身の他人との関係におけるポジティブ・ネガティブな経験について、いくつかある人の表情が印刷された写真のカードを選び、説明します。それがSCARFのどの価値観に基づいて起こった事象なのかを、聞き手と一緒に考えます。
その後、SCARFの価値観がワークショップでネガティブに現れる事例について挙げたのち、それをポジティブな経験と変えるにはどのようなメソッドが考えられるかについて、表にしながら考えました。
結果的に「ワークショップ困ったさんあるある対処法」的なリストができあがりました。
その背景にある心理的な壁を知ることで、相手の態度をより深く理解した、表面的でない改善方法がリスト化されたのではないかと思います。かなり実用的なワークショップでした。



SCARFのモデルは、個々の行動について理解するとともに、このような要因がワークショップのプロセスを邪魔しないよう、デザインの段階で気をつけておくにも有用だと感じました。ワークショップの中立性を考える際にも、気をつけておきたいポイントです。また、日々の自分の行動やとっさの判断について分析する際にも役立ちそうです。

使用されていたカードはPoints of Youの表情セレクションのカードセットでした。人種も年齢もミックスされ、色々なシチュエーションにフィットするこのようなツールは、持っていると便利だなと思いました。
経験を語るにせよ、写真がメタファーになったり、想像することを助けてくれたり、説明するにも聞いている方にも理解を助けてくれます。
ひとつめのワークショップにおいても同様でしたが、一旦具体的な経験をなんらかの象徴や抽象的なものに落とし込んで見ることで、客観視できるプロセスの助けになっているように思います。

WS#3　周縁的な存在という経験

Moments from the Margins

2日目のワークショップは、昨日とは色の違うものから始まりました。「周縁」的な存在であること、そしてその経験についてシェアする、どちらかといえばファシリテーターという立場ではなく、個人としてその立場を深掘りしていくようなセッションです。

技術研鑽の色合いの強いカンファレンスの中で、このようなセッションは多少異色かもしれませんが、NVC（Non Violent Communication）のように、紛争解決など感情にアクセスするワークにおいては必要不可欠な経験でもあります。その反面、参加するファシリテーターにとっても、慣れていないとかなり心理的な負担が大きいものでもあります（もちろん、私たちもそのプロセスを踏むことで、参加者にいかに心理的なプレッシャーを与えているのかを知ることにもなります。）

案の定このセッションは私にとってかなり重たいものとなり、最初の段階で参加ではなくオブザーブとさせていただくことにしました。

このようなセッションでは、この中で話されたことは、一切外には漏らさないことを前提条件として、かなり個人的な経験や、普通なら初対面の人に話さないような内容（そしてもしかしたら長年の友人にすら話さないようなことが）開示されます。それが可能なのは、ファシリテーターが率先して自己開示を行い、また信頼しあうことのできる場作りを行うことができるからです。

そんな場を作ることができるのも、熟練のファシリテーターのなせる技であり、Being の現れであることを痛感し、改めて尊敬する気持ちが強くなる経験となりました。

WS#4　ソシオメトリーを使ってグループの隠れた真実を明らかにする

Uncovering Group Disclosures through Sociometry

さて、全ワークショップからの宿題を抱えたまま参加した最後のセッションは、アイスブレイクでもお馴染みの、誕生日の数字や関心の度合いなどで一列になってみる、あのワークです。ソシオメトリーという名前がついていたんですね。初めて知りました。

アイスブレイク的要素だけではなく、これを繰り返し、質問を深めていくことで、参加者同士の会話を深めていくことができる、というのが仮説です。質問のグレードを説明するのには、アイスバーグモデルが使用されていました。

よくある誕生日順→今の気分→山派？海派？→人生で大切なものは？という流れ。

しかしまあこの時点でメンタルがすでに社会的じゃないモードに入ってしまっていたので、正直言ってなんだかしっくりこない。似た者同士だけで表面的な会話をして終わってしまうように感じて、なんだかもやもやしたのでした。トピックが決まっていて、その背景を深く深く探っていくような質問の流れなら、もしかしたらアイスバーグモデルに沿って納得できたのかもしれませんが、質問に一貫性はなく、彼の仮説の力をそこまで実感することはできませんでした。これについては独自の研究が必要そうです。と、同時に、ワークに参加する際の自分のメンタリティがどこまでワークの結果を左右するか大変よくわかったセッションでした。

閉会式

それぞれのワークショップが終了すると、最後にまたホームグループに帰ってきて、閉会式が行われます。
最後にホームグループで自分の経験をシェアしたり、ひとことでまとめてみたり。この2日間（長い人は4日間）で学んだことはひとそれぞれ。日程の関係で2日目の途中で帰国してしまう人もいるため、閉会式の人数は若干減っています。

今回のマレーシア大会は、全体的にかなり時間があり、ゆったりとした進行だったように思います。休みのたびにかなりの量の食事が用意され、カンファレンス中にお腹が空くことはありませんでした。マレーシア流のおもてなしのようです。

閉会式では、各国によるCultural Performanceが行われ会場を盛り上げていました。最後に主催のマレーシアから、次回開催のグローバル大会事務局へバトンが渡され、カンファレンスは全日程終了となりました。

カンファレンスは、地区別大会を4年各地で行なった後、5年に一度はグローバル大会として世界全体のファシリテーターが一堂に会す大きな大会を行うシステムになったようです。来年は10月29−30日（プレカンファレンスは27−28日）にストックホルム。お金に余裕があれば参加できるかな。

And After Everything's Over

昨年の大阪に次いで２回目の国際カンファレンス。１年ぶりの再開も新しい出会いも🙌世界のスタンダードやトレンド、まどろっこしい文脈に問われないストレートな考え方や表現。ファシリテーションの可能性に魅了された初心に戻される瞬間がたくさんありました。
初日の振り返りでも誰かが言っていましたが、傾向として、より見てわかりやすく、アーティスティックな「ビジュアル」、マインドフルネスを意識し、感覚からたち現れるものを掴み取る「スピリチュアル」、オンラインやテクノロジーを活用する「デジタル」の大きく3つのトレンドがあるなあということが、開催されるワークショップからも見てとれました。
AIやアルゴリズムで人の行動がパターン化され、予測可能になっていく時代に、生身のひとだからこその感覚や感性、創造性が重視されるようになっていることを感じます。そこに自然との共生や持続可能性の考え方も、取り入れられてくるのかもしれないとも。アジア大会なだけあって、多少はいわゆる「東洋的」な感覚が反映されていたのかもしれません。
自分のファシリテーターとしのあり方、今の仕事などを見直すこともできるとても良い機会でした。チャンスを与えてくれたFAJのスカラシップと世界中のファシリテーターに、心から感謝しつつ、この経験を生かしてこれからも頑張っていきたいと思います！
Terima kasih!

Ayane :)